

平成 19 年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会  
第 2 回森林生態系保全再生手法検討ワーキンググループ  
議事概要

◆日 時 平成 19 年 11 月 8 日 (木) 10:30~12:30

◆場 所 環境省近畿地方環境事務所 会議室

◆出席者

<委 員>

木佐貫博光	三重大学生物資源学部 准教授
佐久間大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
野間 直彦	滋賀県立大学環境科学部環境生態学科 講師
日野 輝明	森林総合研究所関西支所 野生鳥獣類管理チーム長
松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 講師

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	田邊 仁 統括自然保護企画官
	高橋 勝志 野生生物課長
	西野 雄一 野生生物課 移入生物専門官
	櫻澤 裕樹 国立公園・保全整備課 自然保護官
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志 環境部リーダー
	保延 香代 環境部リーダー
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人 第三研究部長

◆議 事

1. 大台ヶ原における自然再生の目標

(1) 目標の見直しについて

① 東大台の森林再生目標について

- ・ 温暖化により、現在の東大台はトウヒの生育できる温度環境ではないという可能性はないか？
- ・ 東大台の森林再生の目標としては、樹種は限定せずに、オープンランド（ミヤコザサ草地）を少なくし、従来あったと考えられるヒノキなども含めた林を再生するとした方がよい。

- ・オープンランドは草地に限定すべき。
- ・トウヒを植栽してでも守るということになると疑問がある。現在生育している場所について、できるだけ自然な形で保全していく必要はある。

② 目標の見直しの進め方について

- ・自然再生推進計画の長期的目標は変更する必要はない。まず先に中期的、短期的目標を検討した結果をもって、長期的目標の検討へ繋げていく方がよい。
- ・中期的目標については、具体的な期間を示し、数値目標についても示していく必要がある。

③ 中期的目標について

- ・稚樹が育つことを目標とするのは正しいと思うが、それに対してどこまで手を加えることができるのか、シカの密度の問題も含めて考える必要がある。
- ・森林が減少していく境界線で森林の衰退を止めることが中期的目標になる。
- ・稚樹を守るためにには今のところ柵は必要である。柵の中ではササを刈る必要がある。それを自然再生とすることの是非については考える必要がある。
- ・林床のミヤコザサの分布拡大を防止するという視点も必要である。
- ・ミヤコザサについては、ミヤコザサ草地と林床のミヤコザサに分けて考える必要がある。
- ・草地では光が強過ぎて成長が抑制される。ササ地での後継樹育成については、光抑制についても検討すべき。

(2) 再生事業の今後の方向性について

① 自然再生計画のスケジュールについて

- ・自然再生計画の計画期間をニホンジカ保護管理計画と合わせることを検討すべき。

② 検討すべき項目について

- ・優先順位を決めて、いつまでにこれを決めるといったスケジュールを決める必要がある。あまり時間をおかず、短期集中型で議論すべきである。
- ・中期的目標については、植生タイプごとに示す必要がある。
- ・中期的目標において考えるゾーニングは、東大台と西大台に分けた視点が必要である。
- ・まずは、ゾーニングのたたき台を作る必要がある。森林の中ではいかに後継樹の育成を進めるか。草地では、いかに拡大防止を進めるか。(村上委員)
- ・ギャップ地に関しては、乾燥化や水に関する視点を入れるべき。
- ・ゾーニングには森林 GIS を導入する必要がある。

- ・自然再生計画の見直しに向けて、大台ヶ原地域のササの被度調査を実施する場合には、境界線の部分に着目して歩くようにするべき。

## 2. 植生保全対策について

10/31 に実施されたニホンジカ保護管理検討会において示した大台ヶ原における植生保全対策について。

- ・単木保護対策として、ラクトロン、ヘキサチューブが挙げられているが、失敗事例が多いため実施の可否については検討した方がよい。
- ・ラス巻きについては、樹幹のコケへの影響について検討すべきである。

[文責 近畿地方環境事務所]